

き かい じま お の つ
北琉球奄美喜界島小野津方言の疑問文末標識と言語行為*
—話し手の行為遂行に関する疑問文を中心に—

白田 理人

志學館大学

要旨

北琉球奄美喜界島小野津方言（以降小野津方言）には、聞き手に答えを求める真偽疑問文のうち、日本語共通語のシヨウカのように話し手の遂行しようとする行為に関わる場合の文末標示として、接辞-(yu)mī が用いられ、その他の疑問文と区別される。本発表は、小野津方言を対象に、真偽疑問文・疑問詞疑問文の区別に加え、話し手の行為遂行に関わるか否か、聞き手に答えを求めるか否か、という言語行為に関する二つの観点から、疑問文末標識の形式的区別の体系を明らかにする。特筆すべき点として、まず、聞き手に答えを求める真偽疑問文、及び、自問など聞き手に答えを求めない疑問文の場合、話し手の行為遂行に関する疑問文とそれ以外で形式的区別が見られるが、聞き手に答えを求める疑問詞疑問文の場合は区別が見られない。また、聞き手に答えを求める場合には真偽疑問文・疑問詞疑問文の形式的区別があるのに対し、聞き手に答えを求めない場合には区別が見られない。

1 はじめに

喜界島方言は、鹿児島県大島郡喜界町で話されており、琉球諸語に属する地域変種のうち最も北東に位置する。喜界島には 30 余の集落があり、語彙面・音韻面・形態面に渡る方言差がある。北部に位置する小野津集落（図 1 参照）の方言は、（志戸桶集落及び佐手久集落の方言と同様に）中舌母音を保持している点や**i* に先行する軟口蓋破裂音の口蓋化を經ていない点といった分節音上の特徴（木部 2011 参照）、及びアクセントの面（松森 2011・上野 2012 参照）で島内中南部で話される諸方言と異なっている。

小野津方言には、日本語のシヨウカ相当の、話し手が遂行しようとする行為に関する疑問文の文末標識として、意志勧誘接辞-(r)oo と助詞=ka の連続に加え、接辞-(yu)mī が用いられる。-(yu)mī は、話し手が遂行しようとする行為について聞き手に問い、聞き手に判断を委ねる場合に用いられる。一方、-(r)oo=ka は話し手が遂行しようとする行為について迷っているという心情を吐露する場合に使われ、自問にも用いる。以上を踏まえ、本発表では、従来の真偽疑問・疑問詞疑問の区別に加え、話し手の行為遂行に関わるか否か、聞き手に答えを求めるか否か、という、言語行為に関する二つの観点から、小野津方言の疑問文の文末標識の形式的区別の体系を明らかにする^{1, 2}。

* 本研究は JSPS 科研費 19K13193、及び、国立国語研究所「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクトの助成を受けている。また、プロソディ（注 8 参照）の調査研究に際して JSPS 科研費 19H00530 の助成を受けている。

¹ データは、発表者が 2019 年に小野津集落出身・在住の女性 2 名（昭和 12 年生及び昭和 20 年生）を協力者とする聞き取り調査で得たものを用いる。

² 以下に小野津方言の音素目録を示す： $/p/[p\sim p^?]$, $/p^h/[p^h\sim p^h\phi\sim \phi]$, $/b/$, $/t/[t\sim t^?]$, $/t^h/$, $/d/$, $/k/[k\sim k^?]$, $/k^h/$, $/g/$, $/k^w/[k^w\sim kp\sim k^?w\sim kp^?]$, $/g^w/$, $/ts/[ts\sim ts^?]$, $/t^c/[t^c\sim t^c^?]$, $/dz/[dz\sim z]$, $/d^z/[d^z\sim z]$, $/s/[s\sim \epsilon]$, $/h/$, $/m/$, $/n/[n\sim n\sim m\sim n\sim \eta]$, $/ɲ/$, $/ŋ/$, $/l/$, $/w/$, $/j/$, $/i/$, $/i:/$, $/e/$, $/ë:/$, $/a/$, $/o/$, $/u/$, $/i:/$, $/i:/$, $/e:/$, $/ë:/$, $/a:/$, $/o:/$, $/u:/$ 。本

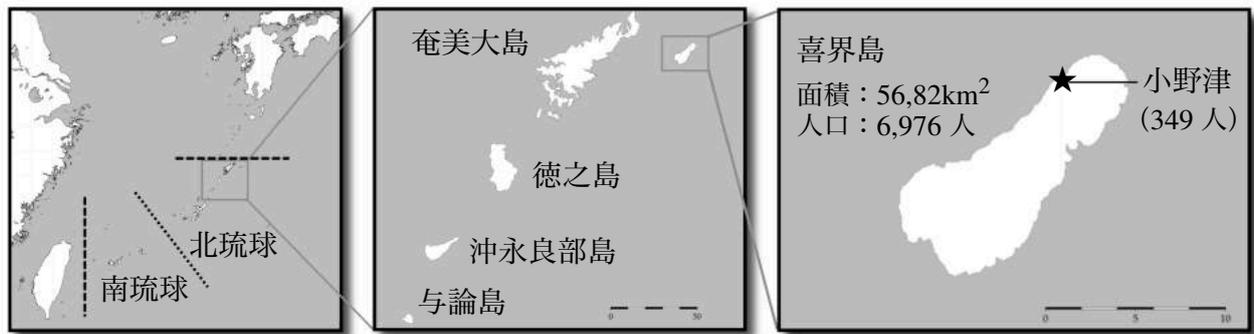


図1 小野津集落の位置（琉球列島と周辺／奄美群島／喜界島）³

2 背景

2.1 -(yu)mī に関わる先行研究

小野津方言の-(yu)mī について述べた先行研究は管見の限り見られないが、近隣の方言の対応形式については報告がある。まず、喜界島阿伝集落出身者による語彙集である岩倉（1941）は、「ミ」という項目を立て、「相手の意志を軽く訊ねる語。」と記述している。次に、奄美大島最北端の佐仁集落の方言の動詞・形容詞の活用形のアクセントを記録した上野（1997）は、佐仁方言の mī が「私が～しましょうか？」を表すとしている（e.g. 'i[kjuNmī 「行きましょうか」、wu[Nmī 「居りましょうか」）。また、瀬戸内町古仁屋出身者による方言の文法記述である蘇（2009）は、「自分の意向に対する相手の気持ちを聞く場合には「... ムい」を使う」としている（e.g. ワガ カキユムい 「私が書こうか」、マジン ヲウムい／ヲユムい 「一緒に居ようか」）。

2.2 「問い」／「疑い」とシヨウカについて

日本語の疑問文の研究においては、聞き手に働きかけ、情報を求める「問い」と、聞き手への働きかけを伴わない自問などの「疑い」が区別されてきた。金水（2015）は、このような区別について、「構造の問題であるとともに、言語行為の問題でもある」と指摘している⁴。さらに、疑問文の形をとりながらも、間接言語行為として主張・提案・申し出・依頼を行う表現があることに言及し、申し出表現の例として、本発表が主眼とする小野津方言の-(yu)mī に機能上対応するシヨウカ（e.g. 「カバン、持ちましょうか」）を挙げている。一方、林（2018）では、シヨウカについて、「事実に沿った情報の提供を求めるのではなく、話し手の行為実現意向に対する相手の応諾の意向表明を求める」として典型的な質問とは区別しながらも、相手に応諾を求める「問い」の文（e.g.

発表では、例文・語形を音素表記で示すが、便宜的に以下の表記を用いる：ph = /p^h/, th = /t^h/, kh = /k^h/, g = /g/, kw = /k^w/, gw = /g^w/, c = /tʃ/, č = /tʃ̣/, z = /dʒ/, ž = /dʒ̣/, ŋ = /ŋ/, r = /r/, y = /j/, VV = /V:/。

³ 国土地理院発行のデータから Thomas Pellard 氏（CRLAO）が作成した地図を編集して用いている。人口は喜界町発行の資料にもとづく、2019年4月1日現在のものである。

⁴ 金水（2015）は、「問い」が典型的に備える条件を、サールの適切性条件に沿って分析し、次のように提案している。(i) 命題内容条件：真偽不定の命題である。(ii) 準備条件：質問者は命題の真偽、あるいは疑問詞に当てはまる値を知らない。また被質問者は、それを知っていると見込まれる。被質問者は、問えば答えてくれる可能性がある。(iii) 誠実性条件：質問者は命題の答え（真偽、疑問詞の値）を知りたいと願っている。(iv) 本質条件：答えを得るための試みと取れる。

「手伝おうか?」)と、迷いの表出である「疑い」の文 (e.g. 「手伝おうか、やめておこうか。」) を区別している⁵。

以上を踏まえ、本発表では、(i) 真偽疑問文か疑問詞疑問文かという疑問文の基本的な分類に、(ii) 聞き手を必要とし、聞き手に答え (情報提示または意向表明) を求める疑問文であるかどうか、(iii) 疑問文の述語が、話し手が遂行しようとする (実現させようとする) 行為を表しているかどうかという言語行為に関わる二つの観点を加え、疑問文を分類することとする。以降 (ii)、(iii) の基準をそれぞれ「聞き手に答えを求める疑問文」、「話し手の行為遂行に関する疑問文」として参照する。なお、小野津方言において、選択疑問文の述語に用いられる標示は、真偽疑問文の場合と相違が見られないため、本発表では選択疑問文と真偽疑問文を区別せずに論じることとする。

3 小野津方言の疑問文末標示

3.1 一般的な疑問文

(話し手の行為遂行に関する疑問文以外の) 一般的な疑問文において、聞き手に答えを求める場合の文末標示として、真偽疑問文では助詞=*na* またはその異形態=*ña* (例 1 参照)、疑問詞疑問文では助詞=*yo* または助詞=*ya* (例 2 参照) が用いられる⁶。

- (1) a. *da=ya khyoodee=ya uñ=ña? uran=na?*
 2.SG=TOP 兄弟=TOP 居る.NPST=YNQ 居る.NEG.NPST=YNQ
 「お前は兄弟はいるか? いないか?」
- b. *da=ya phuni=ži ikyuñ=ña? hikooki=ži ikyuñ=ña?*
 2.SG=TOP 船=INST 行く.NPST=YNQ 飛行機=INST 行く.NPST=YNQ
 「(鹿児島での結婚式に招待されて) お前は船で行くか? 飛行機で行くか?」
- (2) a. *da=ya khyoodee=ya nañnin { ui=yo? / ui=ya? }*
 2.SG=TOP 兄弟=TOP 何人 居る.NPST=WHQ 居る.NPST=Q
 「お前は兄弟は何人いるか?」
- b. *da=ya nuu=ži { ikyui=yo? / ikyui=ya? }*
 2.SG=TOP 何=INST 行く.NPST=WHQ 行く.NPST=Q
 「(鹿児島での結婚式に招待されて) お前は何で行くか?」

聞き手に答えを求めない疑問文の場合、助詞=*ka* が用いられ、随意的に助詞=*yaa* が後続する (例 3 参照)。この場合、真偽疑問文 (例 3a、3b) と疑問詞疑問文 (例 3c、3d) の文末標示は同じになる。

⁵ 日本語のシヨウカをめぐる議論については、上記の林 (2018)、及び、仁田 (1989)、宮崎 (2005、2009) を参照されたい。

⁶ ただし、理由を問う疑問副詞 *nujassi* 「なぜ」 / *nuukassi* 「なぜ〜だろうか」を用いた文では、文末助詞は現れず、述語が接辞-*soo* をとる (e.g. { *nujassi* / *nuukassi* } *khagusima ijiččasoo?* なぜなぜ鹿児島行く .SEQ. てくる .PST-*soo* 「なぜ鹿児島に行ってきたんだ? / なぜ鹿児島に行ってきたんだらうか?」)。

- (3) a. aree khyoodee=ya uk=ka(=yaa)? uran=ka(=yaa)?
 3.SG.TOP 兄弟=TOP 居る.NPST=DUB=SFP 居る.NEG.NPST=DUB=SFP
 「彼は兄弟はいるだろうか？いないだろうか？」
- b. aree phuni=ži ikyuk=ka(=yaa)? hikooki=ži ikyuk=ka(=yaa)?
 3.SG.TOP 船=INST 行く.NPST=DUB=SFP 飛行機=INST 行く.NPST=DUB=SFP
 「(鹿児島での結婚式に招待されて) 彼は船で行くだろうか？飛行機で行くだろうか？」
- c. aree khyoodee=ya nañnin uk=ka(=yaa)
 3.SG.TOP 兄弟=TOP 何人 居る.NPST=DUB=SFP
 「彼は兄弟は何人いるだろうか？」
- d. aree nuu=ži ikyuk=ka(=yaa)?
 3.SG.TOP 何=INST 行く.NPST=DUB=SFP
 「(鹿児島での結婚式に招待されて) 彼は何で行くだろうか？」

3.2 話し手の行為遂行に関する疑問文

話し手の行為遂行に関する疑問文で、聞き手に答えを求める真偽疑問文の場合、動詞が接辞-(yu)mī⁷をとり、随意的に助詞=yaが後続しうる(例4参照)。-(yu)mīは話し手のみによる行為の申し出・相談(例4a~4d)にも、話し手と聞き手が共に行う行為の提案・相談(例4e、4f)にも用いられる。

- (4) a. daa ñimucoo wa=ŋa muc-umī(=ya)? khyamu nen=na?
 2.SG.GEN 荷物.TOP 1.SG=NOM 持つ-YUMI=Q 何とも ない.NPST=YNQ
 「お前の荷物は俺が持とうか？(持たなくても)大丈夫か？」
- b. waa ñimocu mučči kuriran=na?
 1.SG.GEN 荷物 持つ.SEQ BEN.NEG.NPST=YNQ
 — huri mucumī(=ya)? ari mucumī(=ya)?
 これ 持つ.YUMI=Q あれ 持つ.YUMI=Q
 「私の荷物を持ってくれないか？—これを持とうか？あれを持とうか？」
- c. hun hasa da=ñi harasumī(=ya)
 この 傘 2.SG=DAT 借りる.CAUS.YUMI=Q
 「この傘をお前に貸そうか？」

⁷ 接辞-(yu)mīについて、初頭のyuはおそらく非過去接辞に由来しており、共時的にも非過去接辞を取り出す分析も考えられるが、テンス対立が見られないため、本発表では接辞-(yu)mīで単一の接辞と見なす。なお、存在動詞u-「居る」の非過去形は、さらに接辞が続く場合には非過去接辞がゼロとなる(e.g. u-roo 居る.NPST-INFER 「いるだろう」)のに対し、接辞-(yu)mīがつく場合にはuyumīという形で現れる(ただしumīも許容される)こと(例4-f参照)からも、単一の接辞-(yu)mīが成立している可能性が示唆される。

d. wa=ŋa dannaa yaa=kai ikyumi(=ya)?

1.SG=NOM 2.PL 家=ALL 行く.YUMi=Q

da=ŋa wannaa yaa=kai khyuñ=ña?

2.SG=NOM 1.EXCL.PL 家=ALL 来る.NPST=YNQ

「私がお前の家に行こうか？（それとも）お前が私の家に来るか？」

e. wattaee phuni=ži ikyumi(=ya)? hikooki=ji ikyumi(=ya)?

1.DU.INCL 船=INST 行く.YUMi=Q 飛行機=INST 行く.YUMi=Q

「(鹿児島での結婚式に招待されて) 私たち二人は船で行こうか？飛行機で行こうか？」

f. wattai=mu ñaa muduyumi(=ya)? ñaanai huma=ñi u(yu)mī(=ya)?

1.DU.INCL=ADD もう 戻る.YUMi=Q もう少し ここ=LOC 居る.YUMi=Q

「私たち二人ももう戻ろうか？（それとも）もう少しここにしようか？」

話し手の行為に関する疑問文で、聞き手に答えを求める疑問詞疑問文の場合、-(yu)mī は用いられず、非過去形+助詞=yo が用いられる (例 5 参照)。すなわち、聞き手に答えを求める疑問詞疑問文では、話し手の行為に関する疑問文とそうでない疑問文の文末標示が同じになる (例 2 及び例 5 参照)。

(5) a. waa ñimocu mučči kuriran=na?

1.SG.GEN 荷物 持つ.SEQ BEN.NEG.NPST=YNQ

— zuri { mucui=yo? / mucui=ya? / *mucumi(=ya)? }
どれ 持つ.NPST=WHQ 持つ.NPST=Q 持つ.YUMi=Q

「私の荷物を持ってくれないか？—どれを持とうか？」

b. wattaee nuu=ži { ikyui=yo? / ikyui=ya? / *ik-yumi(=ya)? }
1.DU.INCL 何=INST 行く.NPST=WHQ 行く.NPST=Q 行く.YUMi=Q

「私たち二人は何で行こうか？」

話し手の行為に関する疑問文で、聞き手に答えを求めず、迷っている心情を吐露したり、自問したりする場合は、意志勧誘接辞-(r)oo +助詞=ka が用いられ、随意的に助詞= yaa が後続する (例 6 参照)。これは、真偽疑問も疑問詞疑問も同様である。

(6) wanoo { phuni=ži / nuu=ži } { ikoo=ka(=yaa)? / #ikyumi(=ya)? }
1.SG.TOP 船=INST 何=INST 行く.INT=DUB=SFP 行く.YUMi=Q

「私は {船で/何で} 行こうかな？」

4 まとめと課題

4.1 小野津方言の疑問文末標示の概略

本発表では、小野津方言を対象に、(i) 真偽疑問文と疑問詞疑問文の区別に加え、(ii) 聞き手を必要とし、聞き手に答え (情報提示または意向表明) を求める疑問文であるかどうか、(iii) 疑問文の述語が、話し手が遂行しようとする (実現させようとする) 行為を表しているかどうかという、言

語行為に関わる二つの観点を含めて、疑問文末標示の形式的区別の体系を明らかにした。本発表で扱った小野津方言の疑問文末標識は表1のようにまとめられる。特筆すべき点として、まず、聞き手に答えを求める真偽疑問文、及び、自問など聞き手に答えを求めない疑問文の場合、話し手の行為遂行に関する疑問文とそれ以外で形式的区別が見られるが、聞き手に答えを求める疑問詞疑問文の場合は区別が見られない。また、真偽疑問文と疑問詞疑問文について、(話し手の行為遂行に関する場合も含めて) 聞き手に答えを求める場合には形式的区別があるのに対し、聞き手に答えを求めない場合には形式的区別が見られない。

表1 言語行為と疑問文末標示

		一般	話し手の行為遂行
聞き手に答えを求める	真偽疑問	=na~=ña	-(yu)mĩ(=ya)
	疑問詞疑問	=yo/=ya	
聞き手に答えを求めない	真偽疑問・疑問詞疑問	=ka	-(r)oo=ka

4.2 今後の課題

今後の課題として、まず、-(y)umĩの機能のより詳細な記述が挙げられる。-(y)umĩは、基本的には話し手(と聞き手)が遂行しようとする行為にしか用いられず、聞き手のみの行為についての疑問には用いられない(例7参照)。ただし、聞き手の行為の場合でも、話し手がその(聞き手の)行為の成否に関わる場合は、-(yu)mĩも用いることが確認されている(例8参照)。また、話し手の行為に関する場合でも、聞き手に利益の生じない行為について許可を求める場合には、-(y)umĩが用いられない(例9参照)。このように、-(y)umĩには「話し手が遂行しようとする行為について聞き手に答えを求める真偽疑問文に用いる」という一般化では説明できない用法が見られる。

(7) da=ya phuni=ži { ikyuñ=ña? / #ikyumĩ(=ya)? }

2.SG=TOP 船=INST 行く.NPST=YNQ 行く.YUMĩ=Q

「お前は船で行く？」

(8) a. da=ya daigaku=kai { ikyuñ=ña? / ikyumĩ(=ya)? }

2.SG=TOP 大学=ALL 行く.NPST=YNQ 行く.YUMĩ=Q

{ phatarakyuñ=ña? / phatarakyumĩ(=ya)? }

働く.NPST=YNQ 働く.YUMĩ=Q

「(親/援助者が子供に) お前は大学に行くか? (それとも) 働くか?」

b. wa=ŋa dannaa yaa=kai ikyumĩ(=ya)?

1.SG=NOM 2.PL 家=ALL 行く.YUMĩ=Q

da=ŋa wannaa yaa=kai { khyuñ=ña? / khyuumĩ(=ya)? }

2.SG=NOM 1.EXCL.PL 家=ALL 来る.NPST=YNQ 来る.YUMĩ=Q

「私がお前の家に行こうか? (それとも) お前が私の家に来るか?」

- (9) huma=ji thabaku { nudimu khyaamu nen=na? / #numyumi(=ya)? }
 ここ=LOC 煙草 飲む.CONC 何とも ない.NPST=YNQ 飲む.YUMi=Q
 「ここで煙草吸ってもいいか？」

この他、疑問詞疑問文末及び接辞-(yu)mi の後に現れる助詞=ya の位置づけ、疑問文のイントネーション⁸の記述、疑問文末標示の地域差と歴史的発展に関する調査・研究が課題である。

グロス

1: first person; 一人称, 2: second person; 二人称, 3: third person; 三人称, ADD: additive; 添加, ALL: allative; 方向格, BEN: benefactive; 受益, CAUS: causative; 使役, CONC: concessive; 譲歩, DAD: dative; 与格, DU: dual; 双数, DUB: dubitative; 疑念, EXCL: exclusive; 除外, GEN: genitive; 属格, INCL: inclusive; 包括, INFR: inferential; 推量, INST: instrumental; 具格, INT: intentional; 意志, LOC: locative; 所格, NEG: negation; 否定, NOM: nominative; 主格, NPST: non-past; 非過去, PL: plural; 複数, PST: past; 過去, Q: question; 疑問, SEQ: sequential; 継起, SEQ: sentence final particle; 文末助詞, SG: singular; 単数, TOP: topic; 主題, WHQ: Wh question; 疑問詞疑問, YNQ: Yes/No question; 真偽疑問

参考文献

- 蘇鉄嘉 (2009) 『奄美大島・瀬戸内の方言』 (私家版)
 岩倉市郎 (1941) 『喜界島方言集』 中央公論社。
 上野善道 (1997) 「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告—用言の部」 『琉球の方言』 21:1-42。
 —— (2012) 「琉球喜界島方言のアクセント—中南部諸方言の名詞—」 『言語研究』 142:45-75。
 上野善道・西岡敏 (1995) 「喜界島方言の動詞継続相のアクセント」 『琉球の方言』 18・19:145-163。
 金水敏 (2015) 「日本語の疑問文の歴史素描」 『国語研プロジェクトレビュー』 5(3):108-121。
 木部暢子 (2011) 「喜界島方言の音韻」 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：喜界島方言調査報告書』 pp.12-50. 東京：国立国語研究所。
 仁田義雄 (1989) 「「行こうか戻ろうか」—意志表現の疑問化—をめぐって」 『日本語学』 8(8):57-69。
 林淳子 (2018) 「新しい話し手像に基づく疑問文研究の可能性：「ノ」の有無と「シヨウカ」を例として」 『日本語と日本語教育』 46:1-29。
 松森晶子 (2011) 「喜界島祖語における3型アクセント体系の所属語彙—赤連と小野津の比較から—」 『日本女子大学紀要 文学部』 60:106-87。
 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』 ひつじ書房
 —— (2009) 「談話における意志の形成」 『岡山大学文学部紀要』 52:113-126。

⁸ 疑問文末のプロソディに関して、詳細は別稿に譲るが、今回主に扱った動詞非過去形 + 文末助詞 =ña/=yo/=ka、動詞語幹 + 接辞-(yu)mi 及び動詞語幹 + 意志勧誘接辞-(r)oo+ 助詞=ka について述べておく。語末が上昇しない I 系列の動詞 (上野・西岡 1995 参照) の場合 (e.g. u[yu]i 「売る」)、以上のすべての語形について文末は低くなる (e.g. u[yu]ñña 「売るか (真偽疑問)」、u[yu]iyo 「売るか (疑問詞疑問)」、u[yuk]ka 「売ろうか」、u[yu]mi 「売ろうか」、u[ro]oka 「売ろうかな」)。一方、語末が上昇する II 系列 (e.g. [nu]myu[i] 「飲む」) の動詞の場合、非過去形に文末助詞=ña、=yo が後続する場合、及び、語幹に意志勧誘接辞-(r)oo と助詞=ka が後続する場合には文末が低くなる (e.g. [nu]myu[ñ]ña 「飲むか (真偽疑問)」、[nu]myu[i]yo 「飲むか (疑問詞疑問)」、nu[mo]oka 「飲もうかな」) が、非過去形に文末助詞=ka が後続する場合、及び、語幹に接辞-(yu)mi が後続する場合には高くなる (e.g. [nu]myuk[ka] 「飲むだろうか」、[nu]myu[mi] 「飲もうか」)。